

2022年度 こどもの木かけ・野のはな空のとり保育園 自己評価

保育所における自己評価ガイドラインより：「保育所が、保育士等の自己評価を踏まえ、全職員の共通理解のもと、組織としてより良い保育に向けた改善や充実に取り組むために行なう」

1. 基本理念・保育方針

■こどもの木かけ 2002 基本理念

『汝らは、地の塩、世の光である』
(マタイによる福音書5章第13節—14節)

キリスト教の愛の精神を基とし、幼な子が、自ら生きる力を高め、豊かな個性を育むことをめざしています。こどもの木かけ(玉成幼稚園・野のはな空のとり保育園)では、0歳から就学まで一貫した保育方針にもとづき子どもの育ちに取り組んでいます。

■ 野のはな空のとり保育園 保育方針・保育目標

『子どもが現在を最も良く生き、のぞましい未来をつくり出す力の基礎を培う』

子どものありのままの姿を受け入れ、健全な心身の発達をめざして、1人ひとりに丁寧に向き合って保育を行ないます。そうして子どもの最善の利益を尊重し、福祉を増進するにふさわしい生活の場をつくり出します。

- ・子どもたちがのびのびと自分を表現できる生活を大切にします
- ・具体的な経験を通して感性を育て、達成感を味わえる働きかけをします
- ・子どもの気持ちを受けとめ、基本的な生活習慣や人への信頼関係を育てます
- ・おとなとの愛着関係を育み、豊かな生活世界を拡げます

こんな子どもに育ててほしい…アルウィン学園のめざす子ども像

- ①生きる力の礎である「自らの力で探求し判断しながら人とのかかわりをとおした生きる喜びや自己表現が達成」できるように
- ②「ひとりひとりが違ってよい」興味や得意なことを伸ばし個性豊かになれるように
- ③あそびをとおして感性や知的能力・創造性・社会性を体得できるように

すべては環境から

安心して生活し、あそび「空間」環境と、優れた遊具や本物・良質な家具や調度品といった「物的」環境、子どもを愛し慈しむ心と自己研鑽を怠らない保育者という「人的」環境、これらが相まって子どもが主体的に学びの物語を紡ぐ、充実した「時間」の環境がつけられていきます

2. 活動状況と自己評価

【基本的事項】(こどもの木かけ共通)

◆こどもが、自らの力で取り組む姿勢が育ち、周囲とのかかわりを高め、育ちあえているか

今年度はコロナを言い訳にしない、という命題のもと、人との関わりを取り戻す歩みを模索してきた。まずは同じクラスの大人との確かな愛着関係を形成して、安心してあそびに向かえる姿勢を築いてきた。次は成長とともに友だちと同じもの・同じことを求める気持ち、そう出来るのが嬉しいと感じる気持ちを大切にしてきた。子どものペースは様々だが、ひととのつながりが保護者、保育者、友だち、また周囲のたくさんの人たち(幼稚園児や専門学生など)に拡がっていくのを見守るのは保育者にとっても嬉しく楽しいことだった。

◆子どもたちに豊かな感性が育つようなとりくみや自発的なあそびをとりくめるように保育をおこなってきたか

あそびだけでなく生活のどんな場面でも、どんなことも子どもが自発的に、主体的にとりくめるよう、常に保育者が心がける意識は浸透している。「子どもファースト」がうたい文句のような一年だった。「あそび」と「食事」「睡眠」の時間の兼ね合いやバランスをとることはどのクラスにとっても難しいことだが、前向きに意見を申し出て常に試行錯誤してきた。「おとなの都合」で「保育をまわす」ということは決してしないようにしてきた。今年度の食育では、五感を大切に活動に重点をおいた。香りや触感を存分に味わえるきのご割きや、ごはんの炊ける香り、ピザの焼ける香りを楽しんでから味わい、特に2歳児クラスは互い違いの対面で、顔を見ながら一緒に食べる楽しさを伝えることが出来た。

【重点的にとりくむ課題 (今年度の事業計画から)】

◆ 保育の「可視化」に引き続き取りくみ、保育の質向上につなげる

今年度は園児1人ひとりのポートフォリオの作成を始めた。少なくともひと月に一つの具体的なエピソードを記録することで、保育者は「こどもの学びを捉える視点」を理解出来るようになってきた。保護者が自由に閲覧出来る(卒園時には差し上げる)、とても喜んでいただけており、子どもの成長についての対話のきっかけともなっている。子ども自身もポートフォリオを見て楽しみ、子ども同士の会話が生まれ、愛され見守られて育っているという自己肯定感の礎にもなっていると感じる。作成には職員の個性が発揮されている。作成に要する時間の確保の課題を解決させて、継続していきたい。

◆ 保育実践の記述の学びを継続し、保育の質向上につなげる

今年度からおたより帳を複写式にし、園保存部分は保育日誌の個別欄としてみなすことになった。保護者の皆さまに、あそびを通して子どもの学びの物語を二人称記述でお伝えすることは、常に子どもの心の動きを捉える眼と、それをわかりやすく適切に記録する技術が必要である。易しいことではないが、まずは子どもの発した「生きたことば」を記録し、その時の情景が伝わるように意識するといった工夫で、記述の学びを続けてきた。子どもが頑張っている姿や気持ちの葛藤の姿を捉えて記録し、そこから子どもが何を学んでいるかを写し取れるように、書く回数を重ねて学んでいった。他の職員の記録を読むことは大きな気づきになった。

3. 今後の課題・取り組んでいきたいこと（中長期的視野に立って）

- ・更なる業務改善につとめ、ICT化をもう一步推し進めていきたい。また、記録などの事務仕事をするため、保育に関わる以外のまとまった時間を確保出来るようにしていく。
- ・真の意味での働きやすい職場をめざし、1人ひとりの職員が気持ちよくいられる場所とすることが、子どもに愛情をもって向き合い、虐待など不適切な保育を防ぐ重要な要素である。「木かげ」の幼保全職員の理解を深める努力をして、職場環境の改善を続けたい。
- ・幼稚園との交流や学びあいを深めて保育の質の統合性を確認し、保育専門学校で学生に教えている『理想の保育』を実現している園・また職場となることをめざす。
- ・学生とともに、「木かげ」に集う子どもとその親、職員も育ちあうところであることが、「木かげ」の存在価値である。改めて幼保全での職員と、木かげの存在意義を再確認し、木かげのめざすところを共有し、少子化などの難題に一致して立ち向かっていきたい。

◀ こどもの木かげ運営委員会による評価 ▶

1 評価項目の達成及びとりくみ状況について

保育理念を深く理解した上でそれを日常の保育に落とし込むという点や、その時々の子どもの状況に合わせた環境作りを大切にしていることが伺える。また、食育や地域支援においても手応えの感じられる一年となったとのこと。職員の方々のご努力を労いたい。

2 今後とりくむ課題

日々子どもに丁寧に向き合うということは、コロナ禍と関係なく以前もそしてこれからも続けていくことが大前提となるが、それに加え職員の方々の業務効率化や各々のスキルアップなどには積極的に取り組んで頂きたい。また、引き続き保護者向けアンケートの実施を行い、お互いの理解を深めることや問題点に気づく作業を継続していくことが重要。さらに保育園卒園後の幼稚園での長時間保育への移行についての仕組みなどを保護者がしっかり理解できるように丁寧な情報発信を続けていく。日常的な保育内容についてはポートフォリオの作成や「ぶどうの木」などを通してこれまで同様情報発信していく。

3 総合所見

コロナ禍の状況が徐々に変化していく中、職員の方々の奮闘により保育の質を落とさず日々子どもたちに向かい合った一年であった。世の中の状況に関わらず子どもたちの視点に立つということに重点を置き、丁寧な保育を行っている様子が伺える。一方で、現実的にはコロナ禍を背景にこの数年で少子化が加速しており保育園は数年後にはこの影響を受けることは必至であろう。このことに対する特効薬はないのかもしれないが、日々の保育の中で気付く改善点に地道に取り組みさらには幼稚園や保育専門学校を交えた意見交換などを通じ、こどもの木かげ全体で方向性を探っていくことを願う。